ふくしまオーガニック通信

～オーガニック・ランドふくしまをつくろう～

№２４－５

平成２５年　１月１０日

農業総合センター有機農業推進室
http://www4.pref.fukushima..jp/nougyou-centre/
TEL（024）958-1711

先進地視察研修を振り返って
～有機農業における６次産業化の取り組み～

農業総合センター有機農業推進室

去る１２月６、７日に、有機農業推進室主催による視察研修会を実施しました。県内各地から１７名（うち会津地区から１２名）の参加をいただき、６次産業化の先進事例として埼玉県神川町の有機加工事業者と上里町の有機農業者を訪れました。

初日（６日）は、明治３５年創業の味噌・醤油製造を筆頭に農産物加工品の製造・販売を行う(株)ヤマキを訪れ、本庄工場と本社・本社工場を視察させていただきました。４代目となる現社長の案内により加工品の開発状況、試作品、加工施設・設備・機械の状況と現在に至るまでの会社と有機農業者による６次化への取り組みについて説明していただきました。特に、農業生産法人の立上げ、農家との契約までの信頼関係づくり、加工品の開発・製造・販売等における苦労なども話していただきました。参加者からは、有機栽培への取り組み方や有機農産物の加工について、さらには加工品の販売等に至るまで多岐にわたる質問が出されました。

翌日（７日）は、(株)ヤマキと共同で設立した(有)農業生産法人『豆太郎』の代表であり、親子２代で５０年余り有機農業を実践している須賀利治氏に話を聞きました。須賀氏は、他にＪＡ埼玉ひびきの上里一元出荷協議会露地部会・有機ＪＡＳ部会に所属し、１３戸で有機野菜を共同出荷（枝豆主体）すると共に、地元ＪＡ直売所にも出荷しているとのことでした。そしてＪＡ集荷所・ＪＡ直売所

(株)ヤマキ木谷社長とカット商品開発状況

本社「豆庵」にて

のそれぞれに、有機農産物のコーナーがあり、慣行栽培の農産物と並んで販売していました。

また、須賀氏が親子で長年作り上げてきた有機栽培ほ場のうち、ブロッコリー収穫初期のほ場を見せていただきましたが、原発事故の影響により堆肥の素材集めに苦慮していて「堆肥を投入することができず、屑大豆を緑肥として利用しただけで作付した」とお聞きしました。しかし、生育には問題がなく、須賀氏も「前年並みの生産」というくらい良い出来でした。もちろん、これには「土づくりと以前からの記録の蓄積が大事である」とおっしゃっていました。須賀氏は今後、規格外品の有効活用を考えているとのことでした。

須賀利治氏(左下)とＪＡ集荷所（予冷庫）

須賀氏有機ほ場（ブロッコリー）

ＪＡ直売所内有機コーナー

≪お知らせ≫

平成２４年度会津方部有機農業研修会の開催

原発事故以来の土壌等の汚染や風評被害に対抗するための方策を考える研修会を実施します。会津方部ばかりでなく、地域外からの参加も歓迎いたします。

1. 日　時：**平成25年 2月 8日（金）13時**から（受付 12:30～）
2. 場　所：**会津農業共済組合**　大会議室（湯川村桜町字森台77）
3. 内　容：(1)基調講演
　○ 今日のさまざまな汚染下での有機農業の持つ意味と生き方
　　～消費者グループと連携した宅配による販売での経営確立～
　　講師：魚住農園代表　**魚住　道郎**　氏
　(2)提言
　○ 『福島県オーガニック・コンソーシアム』の設立に向けて
　　～有機農業を核とした６次産業ネットワークの構築「優良事例に学ぶ」～
　　講師：福島県ｵｰｶﾞﾆｯｸｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　**南埜　幸信**　氏
　(3)その他
　○ 有機関連資材及び６次化商品等の展示
　○ 有機農業実践者アンケート調査結果の報告

会津の有機農産物をおもいっきりＰＲ！

会津農林事務所農業振興普及部

さる１１月１７日（土）、静岡県内において３２店舗を展開する「しずてつストア」のしずてつ掛川店（静岡県掛川市）で、「お客様感謝祭」が催され、有機農産物の取引産地として本県から、「あいづ有機農法生産組合（横山幸喜組合長）」から会員５名が参加し、イベントを盛りたてました。

会場では、参加する生産組織ごとにテントが張られ、ブースには有機農業に関するパネルとのぼりを設置し、組織会員が「がんばろう。ふくしま！」の文字が入った法被を着て、自慢の有機農産物の販売ＰＲを行いました。

しずてつストア代表を囲んで

当日は、感謝祭を心待ちにしていたお客様が次々と押し寄せておおにぎわいとなりました。

以前から、「しずてつストア」と取引のある「あいづ有機農法生産組合」は、しずてつストアのＰＢ（プライベート・ブランド）商品の有機米や有機野菜の契約ほ場にも指定されています。イベントでは、臼と杵で、有機栽培もち米による餅つきを、会員の手による実演で行いました。つきたてのお餅は、並んでいたお客様に、あんこ餅やきな粉餅として振る舞われ、大好評でした。餅つきを間近で見ていたお客さまやしずてつストアの望月代表取締役も途中から加わり、一緒に餅つきを行い楽しい時間が共有できました。

餅つき実演は大人気

また、有機米と炊飯器を持ち込み、炊きたてのご飯を一口サイズにラップに包んで、お客様に配布しました。試食された方からは、美味しいとの声が数多く聞かれ、放射能に関する質問はほとんど聞かれませんでした。

さらに、ダイコン、キャベツ、カブ、ネギ、ホウレンソウなど旬の有機野菜を持参し、直売を行いました。

しずてつストア掛川店内の
有機農産物コーナー

栽培に携わった農家が直接、お客様に栽培方法や食べ方、そして福島の現状と取り組みさらには安全性を伝えたことで、納得して有機野菜を買っていただきました。

このようなイベント活動は、今年で４回目を迎え、回を重ねるごとにお客様への信頼、交流が深まっているようです。

横山組合長は、「福島の有機栽培米の風評被害は未だに消えていないが、これからもお客様との交流を大切に、美味しい安全・安心なお米を届けたい。」と話してくれました。

本県産有機農産物の新たな販路開拓を目指して
～ オーガニックふくしま安達と二本松有機農業研究会が検討会に参加 ～

農業総合センター有機農業推進室

平成２４年１１月１０日（土）、福島市笹木野萱場の「あべき邸」において、福島県産品販路開拓検討会が開催され、安達地方の有機農業者組織であるオーガニックふくしま安達及び二本松有機農業研究会が参加しました。

この検討会では、農産物だけでなく、その加工食品、加えて農産物を原料とした衣類をはじめとした加工品の開発を行っている農業者とそれに関連する業者、福島の農産物を応援するＮＰＯ法人等が参加し、各々の取組み状況や開発商品のＰＲ等を行いました。

オーガニックふくしま安達によるＰＲ

この中でオーガニックふくしま安達からは、関代表幹事が、昨年震災以降の有機農業の取組や本年からオーガニックコットンの作付けを始めたことや、自身が取組み始めた「地ビール」等の加工品のＰＲ、二本松有機農業研究会の大内会長からは、収穫されたオーガニックコットンのほか、同じく自身が製造しているニンジンジュース等のＰＲを行いました。

検討会の中では、オーガニックコットンを加工した靴下や人形等も提供され、消費者・農業者・加工業者が連携した新たな商品開発と販路の開拓が図られそうです。

二本松有機農業研究会
大内会長によるＰＲ

産業労使『秋祭り』（東京）で有機農産物を販売
～ オーガニックふくしま安達と会津自然塾が参加 ～

農業総合センター有機農業推進室　会津農林事務所農業振興普及部

１１月１３日（火）の夜１８時から、東京都千代田区のホテル「グランドパレス」２階で行われた、産業労使『秋祭り』会場内の福島県物産展の中で、有機農産物の販売を行いました。

参加したのは、二本松市の「オーガニックふくしま安達」と会津美里町の「会津自然塾」の２つの団体でした。安達は地ビールやうどんなどの加工品と米を中心に販売し、自然塾は多種類の野菜やみしらず柿と自家製味噌を販売しました。

オーガニックふくしま安達の関さんと会津自然塾の鹿野さんは、環境保全農業課の菅野主査と共に、福島県農業の現状や有機農産物についてスピーチし、会場に来ていたお客さんたちに訴えました。また、関さんと鹿野さんは、販売の合間に『阿波踊り』などのアトラクションにも積極的に参加していました。

販売したスタッフ

３名でスピーチ

有機実証ほの紹介 ≪会　津≫

会津農林事務所農業振興普及部

＜オーダーメイド実証ほ　喜多方市塩川町　山内　一裕さん＞

有機資材導入による品質向上を目指して！

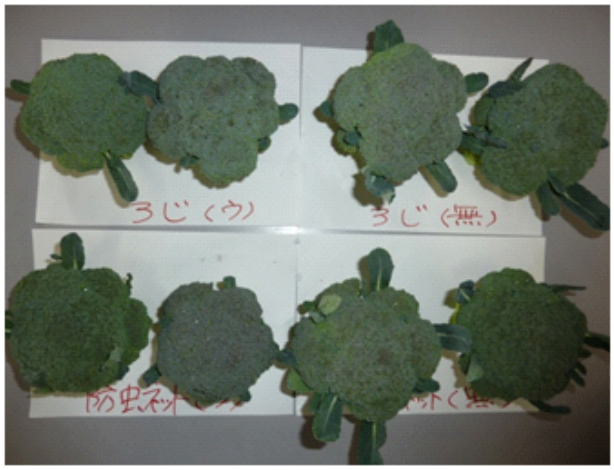
山内さんは、ブロッコリーで有機栽培の技術確立による安定生産を目指して、実証ほに取り組みました。

実証ほの作付面積は１０aで、品種は、「緑嶺」を使用し、元肥として有機肥料の「有機アグレット６６６」を導入、畝の雑草対策としてマルチ栽培を行いました。

播種日は７月５日、定植は８月６日で、実証ほには小トンネルに防虫ネットを被覆した区と、有機資材（商品名：ウインドスター８８９粒剤）を投入した区を設けて、病害虫対策や品質向上を目的に調査を行いました。

収穫期を迎えたほ場（手前が山内氏）

本年は、定植後の高温乾燥で活着が遅れ、さらにコオロギによる食害が多発し、補植したため生育が不揃いとなり、そのため収穫期間が２か月間となりました。なお、マルチ栽培を行ったことで、栽培期間中の除草（手取り）は１回で済みました。さらにほ場の周囲には、障壁作物としてソルゴーを設置しましたが、露地栽培では、コナガ、アオムシ、ヨトウムシが多くみられ、害虫対策に苦慮しました。そこで、微生物殺虫剤のエスマルクＤＦを使用し、害虫の発生密度を抑える事が出来ました。なお、防虫ネットを被覆した区の害虫による食害は見られませんでした。



品 質 調 査

１１月に行った品質調査では、有機資材投入区の品質の玉締まりが良く、規格も揃いが良いものが多く収穫出来ました。この結果に山内さんも大きな手応えを感じています。

今回、実証ほにクマが出没し、同一ほ場内で作付けしていた収穫間近のトウモロコシが被害に遭いました。防虫ネットにも大きな足跡が確認され、今後は鳥獣害対策として電気柵の設置を検討しています。

≪コラム≫ これからの福島県のオーガニックをどう拡げるか

オーガニック・コーディネーター　南埜　幸信

一昨年の３月11日の原発事故による農産物への放射性物質の残留問題を契機に、福島県のオーガニックについては、ゼロからの再出発ではなく、歴史的なマイナスからの再スタートという、予想だにしなかった事態になってしまっている。農業自体の継続すら危ぶまれたなかで、安心・安全を期待する消費者に支えられてきたオーガニックについては､一層の逆風に晒されている。この経過で残念ながら他の新天地を求めて、福島を諦めた生産者もいる。逆に、新規就農でありながらも、福島を愛し福島でのオーガニックに踏ん張り続けている生産者もいる。しかし、福島で農業を続ける生産者は、「福島離れ」という風評被害を受け続けている。これが収まるどころか、福島を避けても消費が成り立つという落ち着き感からか、一層蔓延しているとも思える状況がある。一旦離れた消費者がいまだにほとんど帰ってきてくれないのである。流通・販売企業も、福島産については腰が引けていて、ただでさえ売り上げが低迷しているので、それを下げたくない一心から、相変わらず扱ってみようとする前に、避けようという判断になってしまって固まっている状態であるように思える。出荷前の事前検査で、「放射性セシウム検出せず」であったという結果を提示しても、検出限界以下の数値が問題というような、非科学的な議論になる。まさしく風評被害のなにものでもない。

この状態が続くなかで、私たち福島のオーガニックチームはどのように未来を拓いていけばよいのだろうか？どうすればマーケットが理解を示し、本来の価格評価で取り扱いを始めてくれるのだろうか？この議論を福島県内だけではなく、消費地の特に首都圏の関係者と、世の中に見える形でどんどん進めていく必要を感じている。放射性物質が作物に移行しないように、生産者がどのような血のにじむ努力を重ねてきたのか。その結果、一部の基準値超えの特殊事例の原因究明も含めて、全体としてどのような傾向にあり、その残留レベルはどのような時系列変化をしているのか？これを、公にしてオープンで透明な議論にしていくべきと考える。福島県内だけの関係者の議論では首都圏の消費者からは何も見えてこない。オープンな国民的議論と告知が必要なのである。残念ながらこれを今のメディアに求めることは困難といわざるをえない。現在の日本のメディアは、一部のスクープ的な特異情報を競って取り上げようとしかしないように思える。視聴率を意識した偏ったスクープ報道に偏重しているといわざるを得ない。

じっと耐えていれば、やがて春が来るというような姿勢では、この風評被害は克服できないと思う。春は自分の手で引き寄せなければならないのだ。

≪お知らせ≫

○ 有機農業についての疑問や技術についてのご質問は、有機農業推進室までご連絡下さい。

携帯電話、パソコンからアクセスして下さい。

メールアドレス：yuuki_otasuke_soudan@pref.fukushima.lg.jp　電話：024-958-1711